

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は、市街地の中心部に位置する。東日本大震災の際には、本学区も被災し、市街地の多くが浸水し、大きな被害を受けた。本校は、地域住民の避難所として数ヶ月に亘り運営にあたった。

被災後、学校の研究主題を「ふるさとの復興を担う『人づくり』の展開」とし、国語科、社会科、体育科、特別活動を中心に教育課程全般にわたり復興教育を取り入れ、それを「復興教育学習プログラム」と称し、7年間継続して教育活動を行ってきた。

今年度も、これまでと同様に教育課程全般にわたって復興教育学習プログラムを推進してきた。特に、今年度は、学習者である子供たち自身がそれぞれの活動につながりを感じ、最終的に目指す目標に向かって学習できるように、以下の2点を重点にして実践に取り組んだ。

- 1 本校の「復興教育学習プログラム」を継続して行う。その際、それぞれに行っている学習活動を、学習者である子供たち自身が「人づくり」という視点で一つのまとまりとして捉え、目標に向かって学習できるよう計画していく。

＜復興教育を通して目指す子ども像＞

- 主体的に学ぶ子
- ふるさとを愛する子
- たくましく生きる子
- 自分の命は自分で守る子

- 2 学年末には各自が「復興教育学習」のまとめを書き記し、それを冊子としてまとめ、防災・復興に関する学習の成果を発信する。

II 取組の概要

- 1 授業を中心に据えた復興教育（復興教育学習プログラム）

各学年の年間テーマを決めて、総合、生活科、国語科、社会科、体育科、特別活動を中心に、地域を担う「人づくり」を進める復興教育に取り組んだ。

今年度は、年度当初に目指す学習のゴールを児童と共有するオリエンテーションを行った。



2 復興教育学習プログラムのまとめ

総合や各教科の中で年間を通して学んだことを、児童に振り返らせ、各学年に応じた一人一人の学習成果物を冊子にまとめた。



3 市避難訓練の参加（4月）

5学年50名が、早朝より市一斉に行われた津波避難訓練に参加。登校後、学校の体育館で地域の自主防災組織の皆さんと炊き出しや仮設トイレの設置等の訓練を行った。



4 サケの稚魚放流（4月）

2学年38名が、市一斉に行っている「サケ稚魚壮行会」に参加。1年生の時から育てている稚魚を放流した。



5 歩け歩け運動（7月：PTA行事）

PTA厚生委員会が主催の行事に、保護者、教職員、児童を合わせ約100名が参加。小学校から浄土ヶ浜まで約5kmの道のりを環境整備（ごみ拾い）をしながらウォーキングした。PTAでは隔年でハザードウォークラリー（震災に関連のある場所や避難場所等を周り、親子でクイズを解く活動）も実施している。



6 田老への見学学習（9月）

6学年49名が、三陸鉄道を利用し田老に行き、田老公民館で震災を経験した方から直接話を聞いた。田老展望台から町を眺め、震災当時の様子や町の再建について話を伺った。



7 命を守る会（3月に実施予定）

全校児童250名が、地震発生・津波警報発令時（予告なし）における避難行動の仕方について確認する。その後、たてわり班ごとに児童同士で今年度学習したことや「我が家の防災取組」等防災についての発表をし合い、互いの防災意識の高揚を図る。



III 取組の成果と課題

【成果】

- 1 本校の「復興教育学習プログラム」を継続して行うことができた。今年度は、年度当初に目指す学習のゴールや学習活動を子供たちと共有するオリエンテーションを実施した。その結果学習者である子供たち自身が、それぞれの学習活動を「復興教育：人づくり」という視点で、まとめりとして捉えることができるようになってきた。
- 2 学年末には各自が「復興教育学習プログラム」のまとめを書き記し、それを冊子としてまとめることで、行ってきた学習活動を自分自身で整理して、自分の思いを発信することができた。
- 3 その他、復興教育に関連する各行事を実施したことで、防災や地域復興の意識高揚を図るなど地域のために貢献できる「人づくり」の育成に努めることができた。

【課題】

震災から10年が経過する時期。子供や教職員が変わっても今後も継続して「復興教育学習プログラム」を土台として、復興教育に取り組んでいくこと。その際、本校で目指す具体の子ども像や学習活動についてカリキュラムマネジメントの視点で適宜見直しを図りながら実践を進めていくこと。